

語り合おう、SVCFと福島。 被災者の声に、決意を新たに！



11月28日午後、福島県いわき市のいわき市文化センターで、「原発事故収束・福島の復興—わたしたちは何をなすべきか、何ができるか」をテーマに、福島原発行動隊の福島討論集会を開催しました。集会への参加者は52人、そのうち福島県内からは13人の方が出席されました。

前半では、福島県で復興に向けて様々な活動や事業をされている方3人に行動隊理事の岡本達思を加え、問題提起となるパネルディスカッションを行い、後半はその提起を中心にフリートークを行いました。

福島県内からの参加者からは、国によって避難指示解除の線量基準が1mSv/yから20mSv/yに引き上げられ、避難解除準備区域や居住制限区域の避難指示解除と精神的損害補償の打ち切りが急がれる中で、大熊町では11,500人の全村民中400人弱、富岡町では3,635の全世帯中約260世帯しか帰還を希望していないという厳しい調査結果が示されました。

進まないインフラの整備、あちこちに野積みされた「仮り置き場」とも言われるフレコンパックの山と隣り合わせでの生活、お隣やそのお隣と一緒に暮らせるかどうか分からないという地域社会の実態、山林は手を着けずその他についても追加の除染は行わないという国の方針の中で今後周辺の線量が期待通りには低下していかないのではないかと不安、イチエフの収束や廃炉の今後の進行についての不透明さなどの状況のもとで押し進められる避難指示解除に大多数の避難者がNo！と言っています。「フクシマは二度壊される」、「絆がどこかへとんでった」、福島県内からの参加者の方の言葉が痛切でした。

大多数の帰還を希望しない人たちをどう支援してゆくかと

いう問題、一方帰りたいという人の生活環境、暮らしや仕事へのニーズにどう応えていくのかという問題。避難先での生活については、パネリストの一人からはコミュニティー作りのボランティアを制度化した福島市の試みが報告されました。

一方、帰還と復興に向けては、オリーブ栽培を軸に仕事とコミュニティーの再生を進めておられる農家、イベントを通じてジッチャン、バッチャンの元気を取り戻そうとしている障がい者施設の方から力強い実践が報告され支援が訴えられました。

福島原発行動隊に対しては、久之浜地区の復興に対する支援への感謝とともに、今まさに、心配ごとへの対応、個別のつながりを通しての帰還先の線量測定・追加除染・片付け・除草・清掃、復興住宅や帰還先への引越し支援、中間貯蔵施設搬入路の放射線管理、退職者予備軍について企業とのタイアップなどの人材育成仕組みづくり等々、フクシマのニーズはこうやって明らかにされているのに何を悩んでいるのか？

高齢者がイチエフの収束作業に命がけで直接参加することにより若者の被ばくを防止するという心意気と主たる組織目標を後輩に伝えつつ、このような現地での集会や活動を通して、現地での拠点を作るなどして、さらにニーズを吸い上げ、フクシマの現状と行動隊の活動を様々な形で発信し続けることで、人々が「フクシマを忘れない」よう頑張ってもらい強く要望されました。

福島原発行動隊の存在、活動をより多くの福島の人々に知っていただくという狙いは、準備・広報の不足もあり達成されたとは言えませんが、少なくともその端緒にはなり、フクシマの声を直に聞くことのできた集会でした。(中島賢一郎)

傷痕残す福島県浜通り：被災建物などなお放置

東日本大震災の被災東北三県のうちでも、北の岩手、宮城では、瓦礫のほとんどが撤去され住民復帰に備えて海岸のかさ上げ工事など進んでいる。

しかし、地震、津波に加え、原発暴発による放射能被害を受けた福島県の、特に原発隣接地域は、いまだに大震災直後の無残な状態が手つかずで残っている。

11月28日福島集会に東京などから出向いた5人が帰途、富岡町で短時間ながら避難者住宅の除草作業をし、そのついでに同町海岸近くの漁港や常磐線駅舎の跡など見て回った。三重苦を受けて、復興への一歩さえ踏み出せずにいる福島県中部海岸地域（浜通り）の悲惨さを改めて知った。

東京電力福島第一原子力発電所所在地の大熊町・双葉町はもちろん、隣接の富岡町、浪江町など双葉郡一帯は未だに住むことのできない「避難指示区域」になっている。

放射能の年間積算線量（ミリシーベルト＝mSv）にしたがって「避難指示解除準備区域」（「大半が線量20mSvを下回ると判断される」区域）「居住制限区域」（同20-50mSv）「帰還困難区域」（同50mSv超）に三分類されていて、いずれも宿泊はできない。

いちばん厳しい「帰還困難区域」はバリケードで囲われ、避難している住民が家屋をネズミや雑草から守るために行う一時帰宅も、月に一回（ないし年15回）、09:00-16:00（富岡町は15:00）だけに制限されている。住民が家屋保守作業などのために伴うことのできる応援者は、一回10人以内。予め登録して通行証を取らねばならない。

除草作業をしたのは富岡町のなかでも比較的制限のゆるい「居住制限区域」だったが、「三時になったら区域外に出て下さい」という町役場の録音アナウンスが四六時中流れている。

屋根が崩れていたりすることを除くと、街のたたずまいは震災前と変わらない。が、ふと気づくと人がなく、被曝のゴースタウンであることに肅然たる思いとなった。



津波で流れ込んだままの軽トラック：山田次郎撮影



倉庫も家もなぎ倒されたまま：中島賢一郎撮影



富岡町の海岸の名物だったロウソク岩は折れていた：高橋清撮影



漁港脇の建物は骨組みだけが残っていた：中島賢一郎撮影

第47回院内集会：報告

ふくしま再生の会：田尾陽一氏講演



第47回目の院内集会は、11月20日に参議院議員会館の講堂において、「ふくしま再生の会」の田尾陽一理事長をお招きし、お話を伺いました。

福島県飯舘村を中心に活動する当会は、“若者の力、シニアの経験を世界の被災地「ふくしま」へ！”を合言葉に、被災地域の現場において、被災者と協働し、継続的な活動を行うことを活動の指針としています。

その模様は、映像に収め以下のサイトにてアップされていますので、是非お聴きください。<https://www.youtube.com/watch?v=7iRWhiWMSR0>

第48回院内集会：案内

- 講演：元・原発作業員の独白
- 講師：池田実さん
- 会場 参議院議員会館講堂
- 日時：2016年1月21日（木曜日）

11:00-13:00

※10:30から玄関ロビーで入館証配布

池田実さんは、昨年まで、実際の福島第一原発構内で苛酷な事故収束作業に当たられていた方です。東電サイドからは聞けない、生々しい現場のお話を伺わせていただきます。